

わが弁証法的唯物論の回顧と展望

——唯物論研究会に寄する覚書——

加藤 正

嘗て『思想』誌上に「弁証法的唯物論への道」なる一文を投じ、俗物的意識から理論的意識に、そこから自己の限界を止揚しつつ弁証法的唯物論に到るべき過程と諸條件を指摘して、『理論的思惟（本来の哲学）の恢復が緊急の問題である』こと、そして『理論的思惟の唯物論的弁証法としての形成は、吾々の当面する諸々の事象をそれ自身の必然的な展開において闡明し、その成果を弁証法的唯物論の諸学説のうちに確保してゆくための必須的前提である』と書きつ放して以来——約二年余の時間が経過した。

この二年間に何が齎されたか。哲学論壇における息抜きと中心論題の喪失、反動的倫理哲学の徘徊、持ち越しの惰性的な売文哲学、唯物論の側においては例によつて史的唯物論や弁証法教程の勤勉な翻訳。それはまさしく所謂三木哲学をめぐる哲学的荒淫の反動期であり、唯物論の側においては哲学的成熟までに到らざる徒弟時代であった。それなればこそ最近における唯物論研究会の成立は、沈滞せる哲学界に潮流を作るものとして、将又、若き精鋭を唯物論の遍歴時代に向つて結集するものとして、近來の一快事たるを失わない。

私は成立せる唯物論研究会に対して、この協会はいかなるものとして有意義であるか、との問題を提起したいと考える。ところで新しい時代の意識の裡に育くまれたわが進歩的学徒は、過去において二つの忘れ難い思い出をもっている。

第一の思い出には福本イズムという標題がついている。それは言葉を換えて言えば「全無産階級的政治闘争意識」

のための革命的学徒の進出の思い出である。そしてこの「意識」が「全無産階級的政治闘争」にとって全く誤れる意識でしかないことが曝露されるとともに、福本イズムの哲学は退場しなければならなかった。しかも新しい歴史時代に於ける最も透徹した世界観の基礎をなす唯物論と、この唯物論にとって世界認識の根本方法たるべき弁証法とは、福本イズムの哲学によって啻に助成されなかつたばかりでなく、反対に原型をとどめぬまでに戯画化され終つたのであつた。

しかし、真実の理論がない場合は、饒舌が何等かの役割を果すことは有り得ることである。福本イズムは理論にとつて何物をも齎らさなかつたが、唯物弁証法という言葉の流行を齎らした。進歩的学徒にとつての第二の進出の思い出、即ち所謂三木哲学の風靡は、まさしくこの流行の地盤の上でのみ理解し得る事柄であつた。それは言葉を換えて言えば「新興科学」若くは「プロレタリア科学」のための新時代の学徒の進出である。しかしプロレタリアートの闘争のための諸科学にとつて此モダン哲学が邪魔物以外の何物でもないと解つた後で、三木哲学は散々な目にあつて元の楽屋即ちジャーナリズム用の文化哲学に歸つて行つた。

唯物論と弁証法とは、この二つの進出を通じて全く昇華させられたと言つてよい。そして約二年が過ぎた後になつて、漸く吾々は唯物論研究会の創立に接したのである。これは進歩的学徒の第三次進出と諧謔的に言うことができよう。前二者の進出については次のようなことがいえるだろう。それらは政治的進出と見るときは政治的力の基礎たる大衆から切り離された妄動であり、科学上の進出と見るときは何等の科学的権威をも理論的根底をも有せざる遊戯であると。それらは精々若き学徒の間における一種の倫理的興奮と看做さるべきものであつた。それらの進出は合言葉以外の理論的指針を必要としなかつたので、理論の発展はそれらの進出によつては齎らされなかつたのである。いま、学問世界の進歩的諸要素が第三次進出を試みるに當つて、学的意識にとつて新しい歴史時代における世界観への唯一の通路たるべき唯物論そのものに焦点を合致せしめるに到つたことは、全く合理的な成行きで

あつた。

福本イズムの進出は、「政治闘争意識」のための革命的学徒の動員であつた。三木哲学的進出は科学の無産者的把握のための若き時代の哲学徒の動員であつた。福本イズムは学徒の世界に深刻な衝動を与えた最初の童巻であり、その童巻が片づいた後の沸る泡から咲いた花が所謂三木哲学であつた。学徒の世界は動揺している。学問の世界は新しい時代の大海へ注ぐべき出口を求めているのだ。それで、たとえ如何なる溝であろうとも、溝さえつけばそこに若き潮はおし寄せたのだ。唯物論研究会は伝統の下にあつて沸りつつある学問世界を新しき時代の中に導くべき一つの出口とならねばならぬ。

では、唯物論研究会は如何なるものとして有意義であるか。それは先ず学問に志す人々に向つて学問がその中に閉じこめられている一切の精神的物質的伝統を意識せしめ、それを打破するために協力しなければならぬ。それは更にその時々事情の下において学問を推進せしむべき一切の條件を意識せしめ、この條件の成長とその最大の利用のために協力しなければならぬ。それは、最後に、伝統の科学に対して常に優位に振舞い得べき学問的権威と豊富さを確保して行くために協力しなければならぬ。この最後のことこそ大切である。凡歴史的に意義ある学問上の運動において、科学的権威と学的内容の豊かさを欠いたものなどはあり得ない。これは古い文芸復興や、アンシクロペヂストや、ドイツ観念論の運動を持ち出すまでもなく明かなことだ。いまは思い出として残る前記二回の進出においてわが先輩を把えた思想は何の科学的権威をも有しなかつた。と同時に、科学的以外の意義から評価しようとするれば、それはより一層憐れなものであつた。だがこのことは、科学的な権威と富とを有しない思想によつて導かれる運動は必ずや無為に終るであろうとの真理に対して例証を提供するものである。唯物論研究会が、他の諸点とともに、その最後の点を忘れなければ、この唯物論研究会は新しい歴史時代の科学と科学の使命とのために、凡学問に志を有する一切の真摯な人々を把えることに貢献することが出来るであろう。——唯物論研究会はかかる

ものとなつて始めて有意義であると私は考える。

幸にして、唯物論研究会としての進歩的学徒の進出は、その名の如く新しい学問的意識の根底をなす唯物論の確立と発展とに向けられている。これは何を意味するか。それは、やがて唯物論の理論的成熟が期待され、科学のあらゆる分野において唯物論的立脚地から導かれる諸学説の科学的優越性を素直なすべての学徒に意識せしめ得るに到るであろうということを意味する。即ちこの運動が将来の意義ある発展を約束されているということを意味する。しかしながら、唯物論——これについて吾々はもつと多くを語らねばならぬ。

さて、いまや吾々は、吾が唯物論研究会にして何等かの意義ありとすればその意義の由つて来る所以を次の二つの命題で言い現わすことができる。曰く——

唯物論研究会は、わが学界に「唯物論学派」とでも謂うべき一つの科学的党派を形成するであろう。

この「唯物論学派」は、唯物論そのものが科学及び世界観の最も優れた且つ唯一の正しい指導者であるという理由によつて、もし吾々が方針をさえ誤らなければやがてわが学界における推進的勢力を成すに到るであろう、と。

だが問題はまさにその点にある。指導者についていえば、指導者を最もよく把えたものが最もよく指導される。余は唯物論者である、と人がいうとき、その人が唯物論を如何なる意味において自己の科学及び世界観の指導者に擬しているのか、そして唯物論が最高の且つ唯一の正しい指導者であるというとき、その人はこれを如何なる意味において理解しているのであらうかという点に問題がある——吾々は唯物論を語るに当つて何よりも先ずこの点を解明しなければならぬ。

現在においては、もはや何人と雖も、精神は頭脳物質の所産である、吾人の生命を維持するものは精神でなくて物質である、等々の個々の命題の承認からすぐさま唯物論を世界観の王座に据えようと考ええるものはあるまい。現代の唯物論は、それらの命題を一つの契機として包括するところのもつと広般なもつと根深い基礎の上に樹立されて

いるのであつて、右の自然主義的唯物論その他と區別して特に弁証法的唯物論という名称で呼ばれている。その意味するところは、現代の進歩せる唯物論は、世界の諸事象がすべて自然それ自体の内的必然的な展開の過程即ち弁証法的な展開の過程において成り立つのだということの最も広い意味における承認に基いていることである。即ち、現代の唯物論は、この過程の能う限り広般且つ精細な認識に基いている。一言にして尽せば、唯物論——それはこの過程の認識である。しからば唯物論の優越性と正当性とは、世界秩序に関する人類の認識の成果即ち哲学及び科学の成果を自己の中に包括することによって確定さるべきものである。

余は唯物論者である、と。宜しい。では君は唯物論を世界事象の諸關係についての人智の総成果によつて基礎づけられねばならないもの、基礎づけられているもの、という意味で最高の正しい指導者であると考え、そういう意味で唯物論を信奉しているのか。そうでない場合がこれまでの例であつた。

吾々の間に唯物論が移入されたのは、マルクス主義學説としてであつた。これは若干の不幸な方面を含んでいた。というのは、マルクス主義は弁証法的唯物論の方法に基き世界史の新しい担い手としてのプロレタリア階級の使命と進路とを明かにした、そしてそういう理由からプロレタリアートにとって自己解放の理論となつたのであるが、吾々が哲学的亜流はこの關係を顛倒し、プロレタリアートの「立場からする」世界理解としてマルクス主義と弁証法的唯物論とを自己の指導者に擬した。吾々の間では福本イズムが最初にこの關係を定式化した。曰く、無産者階級は自己の利益を徹底的に主張することによつてのみ全階級利益を止揚し、その止揚においてのみ人類社会全体としての利害を語り得るに到るが、無産者階級が置かれたかかる立場からして、其の社会認識の特性が生ずる、即ちかかるが故に、この階級は事物を媒介性、生成、全体性に於て觀察し、従つてこの階級にとつては自己を認識することが同時に全社会を客觀的に認識することとなる、またかかるが故に、この階級はかかる認識の主体であると同時にかかる認識の客体でもある。かかる特質を持った認識、即ちプロレタリアートの立場にあるが故に、生じた認識方法、こ

れが唯物弁証法である、というのであった。

次に現われた三木哲学においても何等かの進歩があった訳ではない。階級的立場、階級利害等の政治的概念が、無産者の基礎経験という哲学的概念に、階級闘争や階級利益の主張過程という政治的概念が、生の哲学的概念に、政治的党派への奉仕の意図が新興プロレタリア科学への奉仕の意図に変わっただけであった。無産者のなる基礎経験において人は存在と感性的なる仕方をもって交渉する、従つてここにおいては存在は心的なものではあり得ず却つて物的である。その故にここにおいて人は唯物論者である。この基礎経験において人は存在を革新しつつ自己を革新する。この変革的生の過程に生きるものとして、ここにおいては人は弁証法論者である。云々。

右のような考え方が西欧のいかなる哲学の借用であるかはここではどうでもよいことだ。主要な代表を福本イズムや三木哲学において見出した弁証法的唯物論の支持者の共通の思想は、無産者階級あるいは無産者の基礎経験、あるいは一般に無産者的「実践」の圏内において、かかる世界圏の諸規定の規定性の下において形成されたものとして弁証法的唯物論的認識を特性づけた点にあった。そしてかかるものとしての弁証法的唯物論を科学及び世界観の指導者に奉戴ほうたいしたのが従来とらの滔々たる例であった。それは要するところ次のような考え方に導いた――。

凡科学おおよそにおいて優位はその方法にある。方法論こそ福本イズム哲学の中心であった。方法は弁証法において極まる。それはまずヘーゲルにおいて思惟の自己運動の体系として展開された後、無産者階級出でて、これを自己社会的存在性の規定の下に再規定し、思惟の自己発展なる観念論的外被はを剥ぎ、自らの社会的存在によつて規定さるべきものとなして、ここに唯物論的弁証法が生まれたのである。そして――弁証法的唯物論の世界観は、かかる唯物論的弁証法の方法によつて現実世界の諸事象を序列化し綜合したものである。換言すればかかる方法によつて現実世界を貫き、克服せる成果である。云々。

三木哲学においても事情はまさしく同一であった。即ち現実世界の諸内容が、無産者の基礎経験の規定性の下に

包括され、意義づけられることによつて唯物論的弁証法的性格をもてる認識の体系、即ちプロレタリア的なる科学は形成される。

三木哲学は更にこう言つた。

事物が主観との関係を離れてそれ自身ではいかに在るかというが如き問題提起は全く抽象的であり、従つて弁証法的ではあり得ない。諸事象は一定の基礎経験の中においてのみ現実的意味を得るのであり、認識は基礎経験の下に意義づけられてのみ現実的である。これらの哲学の要点は、意識或いは思想をもつて一定の社会的存在、一定の実践即ち生活、の所産と解し、これをマルクスの唯物史観の根本命題に関係せしめて主張することにある。そうして此処から一連の諸課題を引き出したのだ。曰く、弁証法的唯物論乃至マルクス主義を無産者的存在、無産者的実践、無産者的基礎経験の上に産み出されたるものとして、かかる社会的存在『の』意識として把握すること。また曰く、無産者的実践、無産者的生の動きに応じ、『その意識』としての弁証法的唯物論の展開を図ること。従つて弁証法的唯物論者が意識の世界で行うことは、とりも直さず共産主義者が社会的存在の中で行う仕事に対応する。一言にして尽せば、弁証法的唯物論——それは無産者の自己意識の表現である。然るにこの派の哲学者に於て最も典型的なるゲオルグ・ルカッチは、弁証法的唯物論をかく解した結果、無産者階級の自己意識の形成され得ざる領域即ち自然や資本主義以前の歴史にまで弁証法的唯物論的認識を拡大せんと試みるものは、必然にその本来の革命的意義を解消するものと極言し、エンゲルスをもつてマルクスの曲否者となした。しかも、この結論たるや論理的に首尾一貫していて、間断するところがないではないか。エンゲルスは『フォイエルバッハ論』の中でこう言つたのである——マルクス・エンゲルスの一派は現実の世界を、空想的な連関においてでなく、それ自身の連関においてあるがままに把握しようとするもので、一般に唯物論とはそれ以外を意味するものではない、ただこの一派の従来の場合と異なる点は、認識の殆んど全野に亘り（尤も個々の細部は問はずとするも）この立場を徹底しただけである。

さてここに二つの立場が対立した。弁証法的唯物論は無産者階級の意識として規定さるべきか、或いは世界のありのままの認識として規定さるべきか。しかもルカッチはこの二つの立場が原理的に相容れないことを示している。然るに未熟な無精なわが哲学者諸君は、この岐路に立つてこの二つを折衷してしまうことしかできなかった。彼等に於ては思想の首尾一貫性即ち党派性は棄にしたくもなかったのだ。また当時流行していたデボーリン流の哲学は、正統派の仮面を被つて人々の頭を支配したが、ルカッチの側からする党派性を解いてエンゲルスと折衷せしめることは何等この、正統派哲学に抵触するものではなかった。デボーリン哲学の本質はその形式主義にある。彼の哲学の体系は一般方法論としての唯物弁証法、その自然への適応としての自然弁証法、その歴史への適応としての歴史弁証法の三領域に分たれる。そしてデボーリン哲学の秘密のすべては「自然および歴史の領域へ具体化さるべき一般方法論」の領域を設定せんとした点にあるのだが、それが凄^{すじ}いヘーゲル主義であることはとにかくとして、わが折衷派諸君はこの領域を媒介することによって、自然及び歴史のありのままの把握としてのエンゲルスの体系と無産者階級の自己意識としてのルカッチの唯物弁証法体系を折衷することができた。というのは方法が科学の精神をなすものなら、階級意識の表現としてのマルクス主義を科学として見れば、その階級の革命的性質を科学の精神としてこの一般方法論の言葉で翻訳することができる。だがかく翻訳された方法論は逆にあらゆる科学の中へその精神として侵入することができ。この翻訳可能性を拒否するルカッチは恐らく極左主義者でもあつたらう。デボーリン的形式主義の直系は戸坂氏である。彼は最近の所論において、階級性と唯物史観と弁証法的範疇体系と自然弁証法との間に共軛^{きぎやく}の関係を設定し得ると認め、折衷主義の最高の手本を示した。弁証法とは何か。それは内的展開の關係、自己運動による発展の關係を表わすものである。戸坂氏は弁証法的關係を論じないで、共軛^{きぎやく}の關係、割り切れる關係に抛つて折衷を成し遂げたのである。

この折衷的に曖昧にされた二つの視角の対立を、終局的に解決せんとするのが私の問題であつた（拙訳『自然弁

証法』の序文と跋文参照)。一般に人々がこの問題に対して決定的な態度を採り得なかつたことは、人々が諸事象のそれ自身における連関において見るといふエンゲルスの立脚地に居なかつたこと、従つてその連関の表現として弁証法を理解しなかつたことにある。まことに実践は意識を規定する。エンゲルスの立場から事象を把握せんとする実際の試みを持たない哲学者に、エンゲルスを評価することができなかったのは当然である。彼等は弁証法的唯物論への入口を、プロレタリアートとこの唯物論との関係づけに求めた。その際彼等の憐れむべき意識は、この兩者の間にある真の關係を見出すことを得ず、共軛關係、対応關係、相互決定關係の中に把えた。このやり方は弁証法家のものではなく經驗論者の論理学である。そしてこれがまた現代哲学の共通の方法であり、いまの場合について言えば特にディルタイが方法を提供した。そして最後に存在が意識を規定すると言つたマルクスがこの問題に引ずり出されるのである。しかしマルクスはこの命題を、決して福本イズムや三木哲学が理解したと同じ意味で述べたのではなかつた。否、マルクスは自己の科学即ちマルクス主義をもつて、無産者的存在によつて規定されたる意識とは考えなかつた。マルクスは恐らく社会主義或いは共產主義思想の發展の中に無産者の自覚と意志表示の成長を見たであろう。だがマルクスは自己の学説を、プロレタリアートが自己の闘争についていかなる意識を持つていゝるかには關係なく、それ自身において在るところのプロレタリア階級闘争の諸關係の闡明として提出した。エンゲルスは『反デューリング論』の序説において、社会主義はマルクスによつて弁証法的唯物論の基礎の上に打ち立てられて空想から科学に転化した、と述べている。弁証法的唯物論及びマルクス主義を無産者的存在の自己意識の表現として見るものは、それらを空想的社会主義の水準にまで引き下げることが意味する。それはプロレタリアートが依つてもつて立つところの諸關係の在りの俛の正しき認識としてのマルクスの諸学説を社会的存在に対応する意識あるいはイデオロギーの範疇の中に解消することを意味する。科学とイデオロギーあるいは自己意識との區別は、前者が存在の在りの俛の正しい認識であるに対し、後者はただ社会的存在の空想的反映たるに止る点にある。科学

とイデオロギーの間には何等割り切れる関係即ち共軛性きょうやくせいはない。そしてこの割り切れないで残る要素は、エンゲルスの『反デューリング論』の序説および『フォイエエルバッハ論』の指摘によれば、プロレタリアートの自己意識の外において、人智の総果たる哲学（理論的思惟）の帰結として形成され、この要素に基礎づけられてプロレタリアートの自覚、自己開放みかたのイデオロギーとしての社会主義は、プロレタリアートの階級解放闘争の指導理論に質的転化を遂げたのである。

弁証法的唯物論の本質を、プロレタリアートとこの唯物論との対応関係から解明せんとする右の哲学諸派は言葉を代えていえば次の如き陥し穴を持っている。即ちそれがプロレタリアートの自己意識として確立されるためにはまずプロレタリアートの根本性質が闡明せんめいされて居なければならぬ。然るにこれを闡明せんめいし得るものこそ弁証法的唯物論でありマルクス主義でありとすれば、この諸派はつまり弁証法的唯物論を真に把握する道は、真の弁証法的唯物論を把握することであるという無意味な循環を説教しているのである。即ちここには実際に弁証法的唯物論的認識に至るべき緒は見出されず、プロレタリアートと弁証法的唯物論とが、互に相手を尻尾から呑込んだ二匹の蛇のような形に閉鎖環を造っている。人は真の唯物論の姿をとらえるためにはそれをプロレタリアートの腹の中から引き出さねばならないが、プロレタリアートの真の姿をとらえるためにはそれを唯物論の腹の中から引き出さねばならぬ。唯物論を吐き出すために人は自己をプロレタリアートたらしめねばならぬが、プロレタリアートの中に自己を置くためには弁証法的唯物論の流出口から出なければならぬ！

以上すべては何に帰因するか、以上すべての不合理の根底には何が欠けていたのか。それは現実世界をそれ自身の連結に於て在るがままに把握とらえるところの理論的認識として弁証法的唯物論を理解できなかつたことに帰因する。この不合理の根源は弁証法的唯物論に対するエンゲルスの視角の欠除である。しかもこの契機はいまに到るも充分に意識され展開されるに到っていない。そして無産者の固有の意識として弁証法的唯物論を説く仕方は、露骨な沈

澱形態から精緻な昇華形態に到るまで、あらゆる段階において、従来の売文哲学と小見病哲学とのすべてに浸透した。この哲学は頭脳が自己の頭脳物質の組成に応じて各種の思想を分泌すると考えた俗流唯物論と本質を同じくする。というのはこの哲学は認識の本質的部分は主体としての社会的存在の構造——実践形態に依存すると考えているからである。然るに真の認識は対象が主観の中に摂り入れられる際に受ける主観的諸規定から深化され、それ自身の規定性において主観の中に確保される処に成立する。

唯物論的認識に関するこのエンゲルスの観念を私は拙訳自然弁証法の訳序の機会を籍りて擁護した。そしてその際、自然の人格的表現としての神話から、自然を自然としてそれ自身において理解することに道を拓いたギリシヤ自然哲学をもって弁証法的唯物論の伝統の根として指摘した。ベーコンが説いた方法も、事象を主観的規定から解放しそれ自身の規定性において摂り上げることに外ならなかったが、ベーコンの当時においてはそれ自身の規定性において分析せられた事象を全一体に綜合する場合には、デカルトからライプニッツの例に見るように主観の思弁に頼るほかはなかった。だから当時ヒュームまでの経験論者において事物の相互関係における洞察を調べるに、いづれも直観的・直接的な相関、即ち類同・差別の観念、或いは量的比較の観念に止っている。一方プロレタリアートと他方弁証法的唯物論とを、この両極の多少とも注意深い分析なしにいきなり共軛関係や、影と形の関係に結びつけて考える人々はまずこの段階を彷徨しつつあるものと見て間違ない。それはとにかく、より深い事物の相互関係は、ルネッサンス以来の力学の発展の総決算として、単に力学の範囲のみに於てではあったがカントがこれを闡明した。物質の自己運動による展開の関係これである。フィヒテは主観の中にこの関係を、即ち主観の自己運動による展開の関係を、闡明した。そしてシェリングが直観的にこの二つの世界を一つの本体の自己運動による展開関係に結びつけたとき、いまだ全くはそれ自身の連絡を示されていない諸事象の間を貫ぬいて自己の姿を現わしている本体に自然及び精神（主観）とは別な場所を設定しなければならなかった。即ち絶対者としての場所を。ヘーゲル

はシェリングが直観的即芸術的形態の中に把えた諸事象の規定性を明かにし、この諸規定性に即してシェリング体系を改造した。直観的芸術的絶対者は諸事象の諸規定性に規定されて絶対理念となつて現われる。そして世界諸事象は絶対的理念の中において固有の展開を与えられる。自己を定立する諸條件に基づいて行われる自己展開のこの関係をヘーゲルは弁証法的と呼んだ。世界の発展形態に関するかかる見解はフィヒテにおいて主観的実践的特性において与えられたが、シェリングはそれ自身に切り離されたこの特性をもつと根底的な本質の自己展開における一段階として理解した。即ち実践的主体の諸規定を環境的客観の諸規定の綜合の中から展開せるものとして把えることに道を拓いた。弁証法的関係は実践する主体の下にのみ成立するという観念は既にこのときから止揚されているのである。

ヘーゲルは従来実験研究が、また産業の発展が人々の前にもたらしたあらゆる発見や人間活動の新段階をそれらの諸規定を歪めることなく相互関係に齎らしたが、この関係をもたらずものは、シェリングにおいては直観であつたに対し、ヘーゲルにおいては理性であつた。客観的事物の弁証法的関係は直観の下において即ち直観的に与えられるという観念は止揚され、理性の下において即ち理性的に闡明されたる関係として弁証法は確保されねばならぬ。然るに科学上の新発見は世界のあらゆる領域において諸事象の相互関係に関する洞察を深める機会を与えた。即ち二つの客観事象の間の弁証法的関係は、この二つの事象の間に理性的関係(例えば量の質への転化、対立契機の浸透、否定の否定なる法則性)を具体化することによつて生まれるのではなく、一つの事象が自己運動によつて他の事象となるという関係の中に成立するということの洞察である。主観の中に、即ちフィヒテ的实践、シェリング的直観、ヘーゲルの理性の中に維持されるこの関係が、また客観の中にも維持されるということは、吾々が実際にこの変化過程を客観物の上に生起せしめ得るか、或いは一物の中に他物への転化の芽を分析し得た場合にはじめて確定できる事柄である。そして従来これらの確定が多少とも充分に行われたのは無機的自然といつても本当は僅かに力

学的自然の中においてだけであった。エネルギー変化、細胞、遺伝と淘汰等の発見がはじめて全自然の中に転化関係を確定する道を拓いた。そして自然と歴史とのかかる関係は、市民社会の分析からマルクスが生産なる要因を歴史の基底に見出すことが出来たときにはじめてうち立てられたのであった。そしてこの生産がまた歴史的諸事象の自己転化を確定する手段となった。かくして客観世界がそれ自身の転化過程において連関づけられているとすれば弁証法はまさにここに於て確保されねばならぬ。かかるものとしての弁証法、これが唯物論的弁証法である。この弁証法は従って、客観事物そのものの内的発展或いは客観事物それ自身の中において分析できる諸条件の総合の中からもたらされる発展の法則といふことができる。そしてこの弁証法が打ち立てられたところでは、ヘーゲルの理性の担い手たる絶対理念に場所を与える余地はない。こうして客観世界の探究、その分析と総合は、吾々に与えられる諸事象のそれ自身の連関における把握を次々に齎らすのだ。かかる把握の成果が弁証法的唯物論である。従って無産者階級の主観に立つて弁証法的唯物論を把える哲学諸派はいかに滑稽な任務を自らに課しているかが解る。

弁証法的唯物論にとつては、何等かの主観に立つ把握或いは把握における主観的要素は排除されていなければならぬ。それは一切の主観を客観世界の連関の中に成立するものとして把える。世界を把えるところのものとしてのフィヒテ的実践的主観は、既にシェリングにおいて自然の目覚めとして把えられるものとなっている。フィヒテ的主観をより深い根底から把えるシェリング的直観としての主観は、既にヘーゲルにおける主観即ち絶対理念によつて把えられるものとなっている。而も全世界の把握としてのこの絶対理念は弁証法的唯物論における理論的思惟によつて客観的存在の頭脳への反映として把えられた。弁証法的唯物論にとつては、自己を絶対的前提とし、他を把えるが他によつて把えられることのない主観、従つて自己認識が最高の世界把握である如き主観、はもはや存在しないのである。然るに福本イズムの定式化した無産者的認識の特性はまさしくこの種の主観によつて与えられる認識である。福本イズムは御承知の如くわがプロレタリアートとその闘争を客観として、それのおかれたる日本帝国

主義の中でありのままの発展段階と動向とにおいて把え得なかつた観念論であつた。即ちプロレタリアートは福本イズムにおいては認識の主体であつたが嘗て認識の客体とはならなかつた。三木哲学における無産者的基礎経験なる範疇もそうではなかつたか。すべてのものがこの中で把えられたが、これを客観的に把えることは嘗て問題とならなかつた。従つて福本イズムにおける最高の認識即ちプロレタリアートの自己認識は、プロレタリアートは自己の階級利益を主張し通すことによつて、全階級利益を止揚する階級であるという命題であり、三木哲学の最高の認識即ち無産者的基礎経験の自己認識は、自然の存在と感性的なる仕方をもつて交渉する生というにつきる。前者はプロレタリアートに対する全体的認識をプロレタリアートの自己維持の仕方の一特徴の規定の下で達成せんとするものに外ならぬ。利益主張に関していえば、マルクス主義の本質は、弁証法的唯物論的認識に基き、利益貫徹の闘争を社会の客観的發展法則に対応して方向づけた点に存するのである。もしそれ三木哲学の無産者的基礎経験に至つては、マルクスが資本論の頭初において分析した労働過程以上の認識を提供するものではない。

同様のことがデボーリンについても言える。彼は一般方法論としての弁証法によつて一切のものを説明し把えようとしたが、彼は嘗てこの一般方法論なるものを本来の基礎から展開しなかつた。吾々の間におけるデボーリンの亜流については別の機会に論じよう。

イデオロギーとは自己の前提を知らない主観によつて把えられ、独立的意義を附与された、歪められた客観世界の映像であるとエンゲルスは言った。わが従来の哲学者諸君は滔々として弁証法的唯物論とかかるイデオロギーとを区別することができなかつた。

以上すべてを通じて何が欠けて居たか。曰く、客観世界をそれ自身の連関において在るがままに把えるところの理論的思惟が。弁証法的唯物論とは世界のかかる連関の把握に外ならぬことの理解が。

一九三〇年は三木哲学の顛落の年であつた。そして三木哲学を顛落に導いた批判家諸公の所論のうちに少なから

ぬ啓示がひらめいていたことは見落せないところであつたとしても、唯物論を眞の基礎の上において展開するといふ唯物論者の固有の任務は何等必要だけの眞剣さをもつて取り上げられはしなかつた。『反デューリング論』の序説（空想から科学へ）は吾々の間において熱心に読まれた最も古い科学的社会主義文献の一つであり、『フォイエルバッハ論』は同じ意味において最も古い哲学的文献であつた。しかし乍ら創見者の基本的な著述の解剖という骨の折れる仕事よりも、福本対河上の哲学論争というようなオペレッタがもつと時流的であり、人々の関心を惹くものであつた。そしてブハーリンの解説書のような『俗解り』を歓迎した。而も此の書の俗解りは、弁証法的唯物論の本質に人を導くという『難解さ』を全部削除した意味における俗解りであつた。こういう場合にあって、福本イズムや三木哲学をその代表者に見出した哲学的傾向に対して唯物論の側から効果的な反撃を加えることなどは殆ど問題にならなかつた。服部之総氏が『マルクス主義講座』に「唯物論と唯物史観」を發表したとき、これがまず唯一の出色の論文であつたが、しかし決して折衷的所論の水準を越えるものではなかつた。全所論は福本イズム三木哲学の出鱈目な命題に対して唯物論の個々の正しい命題を対立せしめることによつて成り立つものであつたが、同時に弁証法的唯物論と相容れない諸命題にも依拠した。例えば彼は客観物の實在性の確定を、日常生活の意識即ち外国語が健全なる悟性と呼んでいるところの常識によつて為し得るものと考へたが、その際は彼は弁証法的唯物論が感覺的所与をそのままのものとして承認する日常意識の經驗的實在論の程度を遙かに突破して感覺的所与の基底に内在する實在の發展の把握にまで進んでいることを忘れていた。

三木哲学の顛落は服部三木交渉から結果した。そして一九三〇年の論争の頂点において、唯物論の支持者の思想は、デボーリン的折衷的目錄的哲学から一步抜ん出て、弁証法的唯物論のエンゲルスの視角の上に立ち上らんとする形勢を示しつつあつた。それはまさに弁証法的唯物論に対する自然の権利の承認という点において現われた。自然は、それ自体において把握されるならば、生命を人間を意識を、一切の主観を生み出す根底である。唯物論的認

識は主観の脈によつてではなく自然の脈によつて貫かれていなければならぬ。一切の認識主観も、それが認識されるものたる限りは自然の中に立っている。ヘーゲルが全面的に確立した理性は自己の前提を持っていなかった。弁証法的唯物論における理論的思惟は二重の意味で自然を自己の前提として意識している。即ち自然の弁証法的発展における一定段階の所産として、また自然とその展開としての歴史及び意識の弁証法的発展のありのままを反映するものとして。

とはいえ自然の権利もまた三木哲学に対する一つの命題として提出されたにとどまった。そしてここからして、従来の吾々の弁証法的唯物論に対する体系的誤解を清算し、その正しき展開を企図することは何等真剣な問題とならなかつた。拙稿『弁証法的唯物論への道』はこれらの事情に処するために書かれたのであつた（『思想』、昭和五年十二月、「弁証法的唯物論への道」）。私は従来の主観的見解に対して、事物をそれ自身の連関において内的展開において把（と）えるところの理論的思惟即ち唯物論的弁証法的思惟の恢復（かいふく）を前進の媒介として指摘した。だがこの方向における唯物論の擁護に関して最も潜勢力をもつた、だが最も訳の分らない批判は『プロレタリア的立場の擁護の立場から』なされたものである。服部、加藤の立場は党派性の欠除を表わすものであると。私はこれに対して答えるべきであつた。答える意志をも表明した。そして準備に着手もした。然（しか）しながらこの年（あ）が更（あ）まるや否（いな）や、私自身は哲学的諸問題から引離さるべく余儀なくされてしまった。

爾（じ）来（らい）約（やく）二（に）年（ねん）余（あまり）、弁証法的唯物論への道がいかに準備され、いかに辿（た）られつつあつたかについて、私は語るべき何事をも持たぬ。最近唯物論研究会の創立に接したとき、私は何よりもこの『道』がいかに進められつつあるかを見なければならなかつた。そしてその結論はこうである。弁証法的唯物論への道は、その夜明けを迎えつつある。特に私が全連鎖の最初の環として述べた弁証法的唯物論における理論的思惟について言えば、模写論に対する関心、弁証法を認識論として打ち立てんとする君島慎一氏の所論（彼はその際ひどい偏向を冒している）、或いは真実の弁

証法は唯物弁証法としてのみ可能であり、真実の唯物論はただ弁証法的唯物論としてのみ可能であるとなし、このことの証明の中に大きな課題の一つを認める船山信一氏の提案等に、それぞれ成長の契機を見出している。

弁証法的唯物論をその本来の視角から、即ち世界のそれ自身の連関における把握として展開するためには如何なる準備が必要であるか。吾々の認識はこの把握を通じて弁証法的唯物論にまで到達するのであって、意欲によって到達するのでもなければ、最初から弁証法的唯物論的に思考することを頭脳が弁えて居るのでもない。人類はその準備に二千五百年を費した。この把握は、従来の世界観つまり世界把握の中に部分的な形で摂取されていた。近世における自然科学はそれ自身における事物の連関の把握を個々の領域において志すものであった。そして人間活動が思惟する頭脳の前に堆積して行く諸経験の分析がこの把握に到る第一歩の手続きを表わすものだとなれば経験論哲学はそれを擁護するものであった。而もこれらの分析事項を総合してそれによつて世界把握を齎らすものが理論的思惟の综合能力にあるとすれば合理論哲学はそれを擁護するものであった。かかる思惟を自然の光、形而上学的合理論的理性として、その成果を形而上学的唯物論哲学として受取つたとすれば、カントはそれを純粹理性の世界として提示した。純粹理性の自己矛盾を世界発展の根本法則としてヘーゲルが提示したとき、この思惟は弁証法的として自己を立した。しかしここにおいてもそれは世界把握を与えるものではなく、世界把握は専ら絶対理念のものである。理論的思惟は世界の連関の中にあつてこの世界的連関に規定されて自己を展開するが、絶対理念はこの連関を規定している当のものだからである。然るに、一旦世界を合理的連関の中に規定する絶対理念が、世界それ自身の合理的連関の中に解消してしまうことが明かになつた後では、世界の最高認識は絶対理念の自己把握にはなく、この世界それ自身の連関を与えられたものとして辿るところの理論的思惟のものとなつた。弁証法的唯物論はかかる思惟が世界のそれ自身の連関を把握して行くに依つてその把握の成果の総計として樹立されて行く体系である。人類の頭脳が世界把握において、かかる理論的思惟に最高の地位を与えるところから、従来の世界把握と質的

に自己を区別する弁証法的唯物論の意識的な形成は始まる。世界を把握する主体は、他のいかなるものでもなく、ただ事物をそれ自身の連関においてあるものとなし、それを把^{とら}える理論的思惟であるということが全面的な意義をもって理解されるために、吾々は組織的な理論的闘争を行わねばならぬ。人類はそのために二千五百年の闘争を行つて来た。そしてかかる理解を妨げて来たものは二つの要因に帰することが出来る。第一は内的要因であり、これは人類の経験の未発展の結果、かかる理論的思惟が、個々事象の把握でなく世界の全事象の把握に乗り出す通路を杜絶したためである。第二は現存秩序の保持を目的とし、従つてより以上の認識の発展と利害相反する伝統的強権の干渉による外部的要因である。

世界をそれ自身の連関において把握するものとして、従来は一切の世界観と質的に自己を区別するところに、弁証法的唯物論は自己の党派性を保っている。世上往々否^{しばしば}論をなして、弁証法的唯物論のプロレタリアートの党派性を云々するものがある。彼等を啓蒙するにはただ一言で充分である。諸君は「理論の」党派性を擁護しようとするのではないかと。それとも諸君は理論を「党派的に」擁護しようとするのか、と。

弁証法的唯物論の本質、他と質的に自己を区別する本質が、プロレタリアートの立場の表明たる点にないということを私は述べた。これは要するに、弁証法的唯物論の中には擁護すべきプロレタリア的党派性がないということの意味する。それでは、党派的に擁護しようというのか。それは笑止な宗派主義である。弁証法的唯物論の擁護のために結集されなければならぬものは独^{ひと}りプロレタリアートのみではない。いやしくも事物のそれ自身の連関に基づく世界把握に関心を有する一切の学的勢力である。逆説的に言えば、プロレタリアートの党派も、若^もしこの唯物論の本質を理解しないならば、どうしてその理論的党派性の擁護者と認めることができるだろうか。

弁証法的唯物論者の問題は、個々の領域において弁証法的唯物論的把握を遂行し若^もくは遂行せんとしている科学の研究者に彼の研究の意義を理解せしめ、弁証法的唯物論の確立と展開のために協働せしめるにある。そして自然

の把握、歴史の把握、人類の思想の把握を、それ自身においてあるがままの連関の把握として発展せしめることにある。だから、弁証法的唯物論者にとって現在最も緊要なる問題は、再びいうが、人々の頭脳中に形成されつつある理論的意識の芽を指摘し、これを育成し、弁証法的唯物論的思惟にまで高めることにある。これは第一の環である。そしてこの環は鎖の全環、即ち世界の把握としての弁証法的唯物論を導く鍵となるであろう。この鍵の使用法を知る人々のみが弁証法的唯物論の扉を開くことができる。

唯物論研究会のみならず、凡科学的なる運動わよてである限り、その中心点において、運動によって擁護され、運動によって発展せしめらるべき、科学の富を保持しなければならぬ。その科学の富は、いまの場合は弁証法的唯物論である。保持され堆積さるべきこの富の性質に応じて、科学的運動の形態と標語は決定されるのである。

——一九三二・二・五——

後記

本稿は昨年十二月に着手したものだから最初の部分はそのつもりで読まれたし。にも拘らずかかわこの稿は文字通り推敲の足らぬ走り書きである。これに対する批判や質問には必ず詳細にお答えする用意を持っている。この走り書きのあとで、私は『唯物論研究』第四号の船山信一氏の論文を読んだ。私はこの論文を従来の哲学論文のうちで最も出色のものであると主張したい。それは弁証法的唯物論のための理論的闘争の中で、正しき線を擁護することを知っている唯一の論文である。同様に『理想』誌上で読んだ同氏の『観念論の現実形態』も亦同じ意味で注目すべき論文である。弁証法的唯物論の展望にとって同氏の進出は最もよぶ歡ぶべき現象であらねばならぬ。

なお、恐らく物議をかもすであろう党派性の問題については、本号の拙文『出席者大多数の反対あり』を併読されんことを希望する。

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。